

「また花火を上げて、多くの人を感動させたい」

江戸時代から続くみやま市高田町の老舗「塚本花火工業」。花火師の塚本享史さん(48)は、そう願っている。

多くの観衆を魅了する打ち上げ花火。昨年は新型コロナウイルスの影響で、参加予定だった約30大会のほとんどが



開催見送りとなった。17歳でこの道に入り、兄の典利さん(51)らとともに31年間、花火づくりに打ち込んできたが、これほど大規模な大会中止は初めてだった。

中でも、毎年8月に開かれる「筑後川花火大会」の中止はショックだった。父の幸敏さん(故人)の代

夜空に大輪 笑顔見たい

筑後川花火大会 約1万8000発を打ち上げる西日本屈指の花火大会。例年、久留米市と佐賀県鳥栖市の筑後川河川敷に約45万人が訪れる。1650年(慶安

3年)の水天宮奉納花火が起源とされ、戦中や戦後に中止されたが、1950年に復活。それ以降の中止は新型コロナウイルスの影響による2020年が初めてだった。



花火玉に紙を貼り付ける塚本さん。「多くの人たちを元気づけたい」と語る

筑後川花火大会

から、半世紀を超えて携わってきた大会。前年の大会が終わった直後から準備を重ね、

「東京五輪の年にふさわしい打ち上げにして、観客を喜ばせる」と心に決めていた。

ただ、中止の決定に落胆しながらも、下を向かなかったのは「花火の伝統を次世代に

を担当した。

もう一つの思いもあった。

県内でも大牟田市や久留米市などで大きな被害が出た昨年7月の九州豪雨。その被災者たちの存在に、「つらいのは自分だけじゃない」という

思いを募らせた。10月4日、災害の爪痕が残る熊本県人吉



大輪の花火が夜空を彩る筑後川花火大会(2019年8月5日撮影、久留米市提供)

市の球磨川河川敷で、被災者を元気づけようと花火を打ち上げた。
コロナ禍は続き、取り巻く環境は依然として厳しい。打ち上げがなければ仕事は休業状態で、作業と言えは月1回の火薬の天日干し程度になる。だが、人吉市などでの打ち上げの際には、観客の笑顔に胸を打たれた。今は試練を前向きにとらえ、研究のために化学の本を読んだり、新たな色合いを考えようと道端に咲く花に目を向けたりしている。

筑後川花火大会は、20歳代の頃、花火師になって初めて一番の見せ場を任せられた思い出の大会でもある。

「また大会が開かれたら、『やっぱり花火はいいな』と喜んでもらえる演出をする。コロナや災害でつらい思いをした人たちにとって、生きる糧になればうれしい」

そんな願いを抱き、夜空を再び大輪の花で彩りたいと思っている。(古田智夫)